

飛耳長目〈第23回〉開催概要

日 時	令和7年2月4日(火) 午前10時から午前11時30分まで
場 所	安曇野市役所3階共用会議室307
テーマ	里山の木の利用について
参加者	地産地消の器と家具のある暮らしプロジェクト 5名

安曇野で伐採した木の活用の現状と課題

- 参加者 安曇野で切った木を製材・乾燥して、家具を作っている。最近は材料の調達から生産まで安曇野を意識した家具を製造できるようになった。安曇野で切った木を製材し、材にして販売するあづみの里山市は毎年盛況だ。
- 参加者 こども園を運営している。子どもたちにはぬくもりある場で過ごしてほしいという思いから、安曇野の材を使って園舎を作った。松枯れ材で家具を作るワークショップも開いて保護者に触れてもらい、卒園制作では子どもたちが器を作った。
- 参加者 廃棄処分される枝を使い作品を作っている。使う人が使い方を考えるという、使い手と作り手がコミュニケーションを取れるようなデザインを心掛けている。
- 参加者 個人経営の庭師などが切った木は活用したくても行き場がなく廃棄処分されている。個人では製材できず里山の木を活用できずにいるのが現状だ。安曇野市里山再生計画「さとぷろ。」でも木材活用のプロジェクトを進めているが、組合や業者が主となって活動している。市民が木を製材・乾燥ができる場所があるとよい。
- 参加者 切った木をどれだけ有効利用できるかが重要。そのためには、切る技術に加えて活用する作家の存在が不可欠だ。個人で木を伐採している人と作家のネットワークがあれば、木が丸ごと対価を生み出す。安曇野の材というトレーサビリティが確保されることで、販売戦略も明確になる。
- 参加者 市民が木の活用を体験する機会を作りたい。自然保育とも連携すると、子育て支援にも付加価値が出るのではないか。木が廃棄処分されることは、木を生業にする私たちとしては歯がゆい気持ちになる。特に学校や公園の木は地域に還元できる。
- 参加者 教育にも活用して身近に木と触れ合う体験ができるとよい。幼少期や学童期にこうした体験ができると、地球や人に優しい生活を育む力になる。木と触れ合い、加工できる親子で通える場所があればよい。
- 参加者 木を製材し、乾燥させ販売しても事業として収益を上げることは難しい。ただニーズ

はあるので市には支援をお願いしたい。最初は専門業者に協力してもらうことも視野に入れて、市と協力しながら事業を立ち上げたい。

市長 まずは場所の確保が必要だ。伐採などの森林整備には他の財源が充てられるため、必要な機械をそろえる財源としては森林環境贈与税が使える。製材を教えるとなると、技術がなければ指導できない。

安曇野の木を活用するための環境整備

参加者 現在、自宅を新築しており、アトリエとして使っている施設が空く予定だ。この施設を市で有効利用してもらえるのであれば、施設にそろえた木工機械は寄附したい。地域おこし協力隊など木工に興味があり、里山のことを考えながら販売までプロデュースできる人に活用してもらいたい。周辺地域には林業に関わる地域おこし協力隊はいないが、安曇野市で配置を考えてもよいのではないか。

参加者 流通を含めて活用方法をプロデュースできる人がいると、里山再生がさらに進む。そういう役割を担える人に地域おこし協力隊として活動してもらいたい。

農林部長 地域おこし協力隊は募集に向けて調整している。来年度「さとぷろ。」は法人化し、旧離山会館を拠点に活動する。「さとぷろ。」で皆さんの提案を形にしていければ補助金も出しやすい。

市長 旧離山会館で製材まで行うことは難しいと感じていた。先ほどの施設の広さはどれくらいか。

参加者 400坪の広さがある。施設には木工機械のほか、キッチンとトイレが付いていてカフェのような利用もできる。

市長 個人で木工をやっている人は市内にどれくらいいるのか。また、そういった人はイベントで作品を販売しているのか。関連するイベントをやってもよいと思う。

参加者 個人で活動しているのは10人ほど。松本クラフトフェアへ出店する人や個展を開く人もいる。

市長 JAと市が都市部で行うマルシェで安曇野の材を使った作品を販売してもよい。戦略を持ってやるのが大切だ。来年度は市制施行20周年を記念した市民提案事業補助金があるのでイベントに活用してほしい。

農林部長 今年度、市民活動をする皆さんが木を活用するための補助金制度を作った。あづみの里山市も人気があり、毎年続いている。さまざまな取り組みをしているので、うまく

活用できる仕組みが作れるとよい。

参加者 木を余すことなく使って、対価を生み出すことができれば、地域おこし協力隊のその後の起業につながって人が定着すると思う。ブランド力は価格も関係するため、材を売る時には適正な価格を設定することも大切だ。全体にお金が回るようなシステムができればよい。対価が生まれる仕事であれば若い世代も興味を持つ。

農林部長 「さとぷろ。」が法人となるため、そこで取り組むことになると思う。各部署には、伐採して利用しない木があれば連絡するように周知している。伐採した学校の木でベンチを作るなど、やれることを徐々に増やしている

市長 皆さんからの提案を整理したい。新年度予算には間に合わないが、工夫次第で進めていけることもある。木があっても、活用できる人がいなければ進んでいかない。さまざまな取り組みをしている人がいるので、「さとぷろ。」と連携できるとおもしろい。「さとぷろ。」が安曇野のブランドになっているので、ソフト面を拡充していく。